

文学博士松下忠君の「江戸時代の詩風詩論——明清の詩論と

その撰取」に対する授賞審査要旨

松下忠著「江戸時代の詩風詩論」は江戸時代の詩風詩論を組織的に扱い、併せて明清の詩論とその撰取について考察している。本文千六十余頁に及ぶ大著である。

上編（総論）中編（各論）下編（明清の詩論）にわかれ、総論では江戸時代詩壇の時期を四期に分け、各期における詩壇の趨勢等を扱い、各論では四期における主要な詩人の詩風詩論を個別的に考察している。下編の明清の詩論では明清の三大詩説として格調説、性靈説、神韻説を扱い、日本の詩論にどのように撰取されたかを考察している。その所説を見ると総論では各論にとりあげた詩人選出の基準としては第一に詩話詩論に関する論著或はこれに準ずる論著を有すること、第二に公刊された詩文集のあること、第三に韓使來聘に際して韓使に接触した学者文人たること、第四に江村北海の日本詩選その他の詩選集に多くの詩を採録されたことを目標としたとある。時期区分については全体を四期にわけ、第一期は慶長八年（一六〇三）から延宝七年（一六七九）に至る七十七年間（約八十年）とし、詩文よりも経学を専らとした時期で詩文としては草創期であるとし、第二期は延宝八年（一六八〇）より宝曆九年（一七五九）に至る八十年間とし、これを元禄時代を中心とする前期と吉宗の享保時代を中心とする後期とに分け、前期では木下順庵とその門、林家とその門、伊藤仁斎とその門が活躍した時代、後期は荻生徂徠とその門が活躍した時代とし、前期では経学が主であったが後期は詩文が主になったとする。第三期は宝曆十年（一七六〇）から天保七年

(一八三六)に至る七十七年間(約八十年)であり、徂徠の古文辞学派が凋落し経学と詩文とがはっきり分離し、詩論が盛んになり、職業的詩人が多く出て詩壇の爛熟期となったとする。第四期は天保八年(一八三七)より慶応三年(一八六七)に至る三十一年間(約三十年)であり、詩壇の特色として第三期詩壇の折衷説の成立を継承して折衷説の時代であるとしている。

各論では総論で四期にわけたのにもとづき、各期の主要詩人の詩風詩論を考察している。第一期では藤原惺窩、那波活所、松永尺五、林羅山、元政上人、石川丈山、林鶴峯、木下順庵、伊藤仁斎など十二人を扱い、第二期では木門(木下順庵門)の南部南山、新井白石、室鳩巢、祇園南海、護園学派(徂徠)の荻生徂徠、太宰春台、服部南郭、林家の林鳳岡、秋山玉山、古義学派(伊藤仁斎)の伊藤東涯、その他、貝原益軒、鳥山芝軒、梁田蛻巖など十九人を扱い、第三期では竜草廬、六如上人、中井竹山、皆川淇園、山本北山、市河寛齋、大窪詩仏、朝川善庵、篠崎小竹、菊池五山、中島棕隠など十三人を扱い、第四期では広瀬淡窓、梁川星巖、安積良齋、広瀬旭莊、齋藤拙堂、芳野金陵、菊池海莊、大沼枕山など十四人を扱っている。

各詩人の考察はそれぞれ詳細でありその経歴を説き、ついで詩風詩論を考察している。一、二を挙げると第一期では藤原惺窩をまず考察している。惺窩は文章達徳綱領を著し、林羅山の編した惺窩文集や菅玄同編の続惺窩文集、その他があるが、経学を主とし、詩文では詩よりも文を主としている。詩にも関心はあり、詩論をのべているが、道を重んじ貫道文学観であり、道徳的詩文観であったとする。また詩文の変遷を認め特定の時代や人物を限って貴ぶ、ぶということはなかったとしている。第二期の中、木門の祇園南海については詩人としても詩論家としても近世詩壇におけ

る第一流の人物であるとし、詩論として詩学逢原や南海詩訣、明詩俚評等の著書によって影写説を唱道したことを論じ、それによって近世詩歌論史上に不動の位置を占めたとし、この影写説は格調説、性靈説、神韻説にも十分韻頌し得る説であるとする。彼ははじめ格調説を重んじたが四十五歳の頃影写説を確立したとしている。影写説は招く意を表す際に招の字を顯言せず、しかも言外に勸誘招待の意が十分にあらわれる手法を影写と称するとする。南海は「詩は必ず其面影をうつして読む人考へてげにさこそと感心するやうに作るべし」とも言っており、影写の手法として境趣と雅俗についてのべている。それらにより影写説は格調説と神韻説との長所をとり二つを併せた上に組織された独創の詩説であるとしている。

下編では明清の詩論として李攀竜、王世貞の格調説、袁宏道、袁枚の性靈説、王士禎の神韻説を考察している。これらの諸説は人々により異なる点はあるが総括的に見ると格調説とは詩の修辭を主とし格調を重んずるのであり、性靈説は性靈を重視し、作者の個性を重んじ、性靈より流露する自由にして清新な内容の眞実を求める。神韻説は言外の余韻を重んずるのである。それらの詩説がどのように江戸時代の詩論に摂取され、影響したかを考察しているが、それは各論における詩人の個別的な考察においてこの点が重要な問題としてとりあげられている。

本書を全体として見ると明清の詩論の考察には鈴木虎雄氏の支那詩論史や青木正児氏の清代文学評論史その他従來の研究の成果の上になつている点が多いが、明清の詩論がどのように摂取されたかを考慮しつつ江戸時代の詩風詩論を組織的体系的に考察している点は本書によつてはじめてなされた所である。態度も公平で所説も穩健でありその中に創見もある。祇園南海の影写説の意義をといた点などもそれである。ただ各詩人の詩風をその詩的作品に即して芸

術的価値の面から明らかにしてゆくことは主なる目的でないらしく思われる。しかし詩論の面からの考察はすべて精緻でよく整理されているので、その方面の研究として従来の欠を補い、江戸時代詩論史の研究として開拓する所が多くすぐれた業績であると認められる。